

かしこくカーライフを楽しむためのコミュニケーションペーパー

Keeper Fan!!

Special Interview

中嶋一貴さん × 関谷正徳さんが語るクルマと未来

マシンのスピードや爆音、ボディのカッコよさ…。
モータースポーツの魅力はそれだけではありません!
SUPER GTにLEXUS TEAM KeePer Kraftとともに
参戦し、しのぎを削る
LEXUS TEAM PETRONAS TOM'Sの
中嶋選手と関谷監督に熱く語っていただきました!



中嶋選手と関谷監督の愛車にクリスタルキーパーを施工させていただきました。「やっぱりクルマはキレイじゃないと、乗りたくないし乗せたくないよね」とツヤと輝きに満足していただきました。



「レースを通じて、子どもたちに感動と喜びを与えていきたい」

中嶋 一貴 (なかじま・かずき)
父・中嶋悟のレースを幼少時から見て育ち、97年カートレースデビュー。02年にフォーミュラトヨタ・レーシングスクールでスカラシップ生に選出。翌03年にフォーミュラトヨタシリーズに参戦し、デビューイヤーでチャンピオンを獲得し、07年はF1直下のカテゴリであるGP2でシリーズ5位を獲得し新人王となった。その翌年ウィリアムズF1チームにてF1GPにフル参戦。親子で世代を超えてF1GPに参戦。日本のモータースポーツを牽引している。

プライベートでもクルマに乗りますか?

中嶋: はい、良く運転します。クルマの運転は好きです。自分だけの空間をどこへでも持っていけますからね。
関谷: 良いクルマを買って、女性をナンパしようかと思わないの(笑)?
中嶋: いやあ、今はクルマを持っていても珍しくないですからね。
関谷: 僕らの時代は良いクルマに乗って女性とデートすることって、ある意味ステータスだったけど、一貴の時代以降になるとその価値観はなくなってきてるよね。BMWとかちょっと良いクルマだと「前の彼氏も乗ってたわ」なんて言われたりして。思い切ってボルシェとかフェラーリとかランボルギーニにいかないと驚かない。一貴にはそれくらい思い切ったクルマに乗って目立って欲しいけど、性格的に無理だろうな(笑)。
中嶋: そうですね(笑)。でも女性から「良いクルマ乗って

る人って素敵よね」という空気を出してくれたら、男性もその気になるんじゃないかなと思います。
関谷: 僕もプライベートで良く運転しますよ。メンテナンスや手入れも自分でしますし。でもコーティングは意外としていないんですね。今回コーティングをしてもらって、すごくピカピカになってうれしいです。

日本の若者のクルマ離れについてどう思われますか?

関谷: 日本人はメンテナンスや手入れが下手なんですよ。買って捨てる、使って捨てるという文化が定着してしまって、ものを大切に長く使う文化が忘れ去られてつづある。クルマにしても、家にしても、手入れは大事ですよ。それから奥さんのお手入れもね(笑)。奥さんを手入れすると、愛着がわきます。新しいものにすると、問題がおきます(笑)。コーティングをするのはもちろん、まずクルマを大切にすることを定着させないと愛着はわかないし、クルマ好きは増えていかないんじゃないかと思うな。

中嶋: 最近、モータースポーツ界でもそれ以外のクルマ業界でも、クルマ離れに対して問題意識を持ちはじめますよね。関谷監督の時代は、経済と一緒にクルマの性能がどんどん上がっていったって、生活の中でクルマのプライオリティは高かったと思います。けど、それが何十年かかけて崩れてしまった。昔を取り戻すには時間がかかるし難しいですけど、逆にチャンスだと僕は思っています。僕らの世界は、お客さんがいてこそ成り立ちます。若い人がクルマへの興味をなくせば、その影響をものに受ける。SUPER GTでも、他のレースでも今、子どもたちが楽しめるような場を提供しています。子どものときの記憶は残るものだから、レースを見てもらって感動と喜びを与えることで未来のレーサーになるかもしれない子どもたちと関係を作っていけたらと思っています。

関谷: 一貴にはモータースポーツ界を背負って頑張ってもらわないと!モータースポーツ界も自動車メーカーも、それからクルマに関わる企業、もちろんキーパーコーティングさんも、クルマに興味を持てるような環境づくりと十年後二十年後のクルマの未来を一緒になって考えていかなきゃいけないよね。

カーレースの魅力とは?

中嶋: レーサーは、冷静さと思いつきの良さ、どちらもバランスよく持たなければなりません。特にSUPER GTレースに関しては500クラスと300クラスの2つがあって、500クラスの僕らからすると自分たちより遅い300クラスのクルマを抜いて行かなきゃいけないので、相手の動きや思考を読みながらも、思い切るところは思い切って、引くところは引くというさじ加減が難しいですが、それが面白い。どのレースでもそうですが、リスクを伴いながらもできるだけ早く、でも安全に勝つために、綱渡りをしていくような感覚が魅力です。この魅力をたくさんの人に感じてもらいたいと思っています。

関谷: 今、僕が課題だと思っているのが、われわれを感じるモータースポーツの面白さとお客さんが感じるそれとが食い違っていること。僕は、モータースポーツは人間のすべての能力を使うスポーツだと思っています。筋力や瞬発力というフィジカルな部分だけでなく、判断力や洞察力のような頭脳やファイティングスピリット、そして技術、すべてを駆使する。簡単そうで難しいんです。でも多くは「マシンの性能が良ければ誰が乗っても速く走れて勝てるんでしょ?」と思われる。言ってみればレーサーはマシンのひとつのツールとしか考えられていないんです。そうじゃないんだということを伝えることがこれからの僕の仕事だと思っています。今、新しいレースプロジェクトを立ち上げているところです。モータースポーツの本当の魅力をもっともっと広めていきたいですね。



「家でも、クルマでも、手入れすることで愛着がわくんです」

関谷 正徳 (せきや・まさのり)
日本人初のルマン24時間レース・ウィナー。高校卒業後、静岡マツダに入社。社員仲間と耐久レースで72年に4輪デビュー。77年にマツダ・サバンナでスーパーツーリングカーレースのチャンピオンに。95年にはマクラーレンF1-GTRで日本人としてルマン24時間に初優勝。以降全日本ツーリングカーやGT選手権で活躍。現在はTEAM TOM'Sの監督、そしてフォーミュラトヨタ・レーシングスクール校長を務める。